アーティスティックスイミング・チーム
東京2020オリンピック日本代表
安永真白（やすながましろ）さん（22歳、吹田市在住）

夢舞台のその先をめざして

水面から浮かび上がるような足技の美しさ。プールをダイナミックに泳ぎ、水しぶきを上げる力強さ。東京オリンピックの舞台で、海外選手に負けじと存在感を示す安永真白さんの姿があった。

彼女とアーティスティックスイミングとの出会いは、約14年前。小学3年生のときに習っていたスイミングスクールのコーチに勧められ、片山市民プールで開催されていたシンクロ教室に通いだしたのがきっかけだ。物心付いたころから競泳をしてきた彼女にとって、もっとも新鮮だったのが競技中の景色の違いだという。競泳ではプールの床しか見えないが、シンクロは景色が目まぐるしく変わる。床や天井、観客の顔や横で演技する仲間の表情まで見えるのが楽しくて夢中になったと彼女は笑いながら話す。

小学6年生のときに、現在の井村アーティスティックスイミングクラブに入会し、そこから本格的に打ち込み始める。「できないことがあると、できるようになるまで練習する」をモットーに、ひたむきに練習を続けた。その結果、中学2年生の時に国際大会の代表に選出、高校生になってからは世代別日本代表にも選ばれた。もともと高校卒業までと決めていた競技生活だったが、世界の舞台で演技を重ねるうちにオリンピック出場という目標ができ、それをかなえるまでは辞められないと強く思うようになった。

そうした気持ちを揺るがず持ち続けたからこそ分刻みで行われる厳しい練習にも耐え、東京オリンピックという念願の舞台に立つことができた。そこで見た景色は、これまで数多くの大会に出場してきた彼女にとっても「まるで違う、特別なもの」だった。無観客での開催だったが、それでも圧倒される規模の大きさ、独特な雰囲気を感じたという。結果はチームで4位と、表彰台まであと一歩届かなかったが、これまで関わってきた多くの人に感謝を表す精一杯の演技を披露できた。「あっという間の夢舞台だった」と振り返る彼女の目には、早くも次の目標が映っていた。

「メダルを取りたい」。新たな目標達成に向けて、彼女はこれからも泳ぎ続ける。

市の広報番組で放送した安永真白さんの特集動画も公開しています